

川崎病における γ -グロブリン療法
—冠動脈障害の長期観察および投与法の検討—
(分担研究：川崎病の疫学的研究)

古庄巻史¹⁾、神谷哲郎²⁾、中野博行³⁾、清沢伸幸⁴⁾、四宮敬介⁵⁾、林寺 忠⁶⁾、広瀬 修⁷⁾、
真鍋 穰⁸⁾、瓦野昌治⁹⁾、横山達郎¹⁰⁾、田村時緒¹¹⁾、森 忠三¹²⁾、馬場国蔵¹³⁾、馬場 清¹⁴⁾、
城尾邦隆¹⁵⁾、瀬戸嗣郎¹⁶⁾

要約 川崎病急性期の冠動脈障害(CLA)の発生は γ -グロブリン治療群(GG群)では246例中43例(17.5%)、アスピリン治療群(ASA群)では94例中38例(40.4%)であった。¹⁾CAL発生例を各々100%とした場合、2年後、GG群では92.7%が、ASA群では80.6%がエコー上、CALが正常化した。また2年間、CALが持続するような症例では急性期の治療中にCALのない症例に比較して、白血球(好中球)数の低下率が極めて悪かった。GG療法の有用性を再確認するとともに、白血球数の変動を観察することにより、 γ -グロブリン投与量を加減できるように思われた。

見出し語：川崎病、 γ グロブリン療法、冠動脈障害の残存率、白血球数の変動

研究目的および方法 川崎病におけるCALの長期残存率をGG群とASA群に分け比較し、GG療法の有用性を検討する。また急性期の白血球数とCALの残存率との関係をみてGG療法を再検討する。

1) CALの残存率：1983年4月より1986年6月まで下記の16施設に入院した川崎病患者を対象にGG療法の有効性を検討する3つのcontrolled studyを行った。^{1),2)}この症例の中で2年間followできたASA群の94例、GG400mg/kg/day×5日を行った93例およびGG200mg/kg/day×5日を行った153例をGG群として、両群のCALの残存率を比較検討した。CAL

の評価は心断層エコー法(神谷らの基準)によった。

2) CALの残存率と急性期の白血球数の変動：上記の川崎病患者363例についてretrospectiveにCALのなかったもの、一過性拡大のあったもの、CALの持続性拡大(30日以上)のあったもの、2年間CALが残存したもの、の4群にわけ、急性期の治療開始1週間以内の白血球(好中球)数の変動を観察し、4群間で比較検討した。²⁾

結果 1) CALの残存率：急性期におけるCALの発生率はGG群で246例中43例(17.5%)、

- 1) 小倉記念病院小児科 2) 国立循環器病センター小児科 3) 静岡県立こども病院循環器科小児科
4) 京都府立医科大学小児科 5) 京都大学医学部小児科 6) 国立京都病院小児科
7) 大阪府立母子保健総合医療センター 8) 耳原総合病院小児科 9) 和歌山赤十字病院小児科
10) 近畿大学医学部心臓小児科 11) 天理よろづ相談所病院小児科循環器科 12) 島根医科大学小児科
13) 神戸市立中央市民病院小児科 14) 倉敷中央病院小児科 15) 九州厚生年金病院小児科
16) 公立甲賀病院小児科

ASA群では、94例中38例(40.4%)であった。CAL(+)のものを両群とも100%とした場合、以後2年間のCAL残存率は両群とも序々に低下

し、2年目にはGG群でCALの92.7%が、ASA群では80.6%が正常化した。

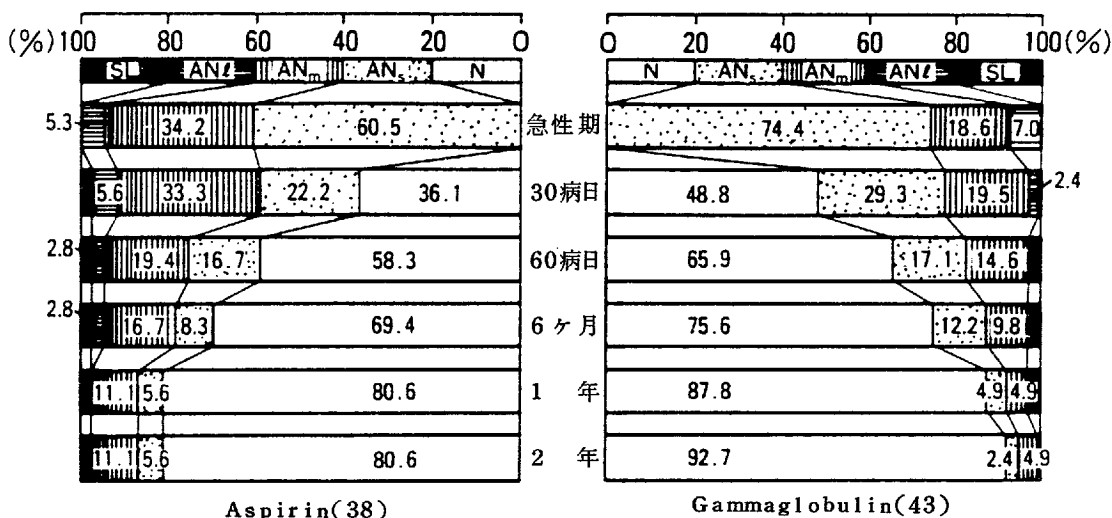


図1 治療法別にみた冠動脈障害の改善状況

()は症例数

N: normal, ANs: Aneurysm Small, ANm: Aneurysm Middle, ANe: Aneurysm large, SL: Localized Stenosis

2) CALの残存率と急性期の白血球数の変動:
CAL発生のない例では治療開始とともに白血球は1週間以内に急激に低下(白血球数は10000/cmm, 好中球数は5000/cmm以下)したが、2年間CALが残存したものではむしろ増加した。

さらに一過性拡大, 持続性拡大を呈した例ではCAL(-)のものに比し, 白血球(好中球)数の低下率は悪く, それぞれの群で有意差が認められた(図2, 図3)²⁾。

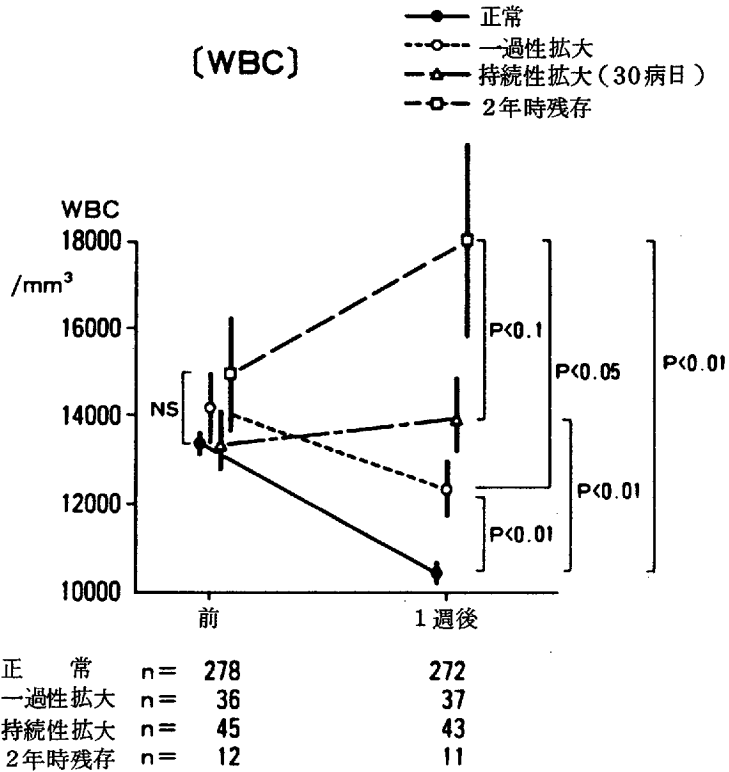


図2 冠動脈障害と急性期の白血球との関係

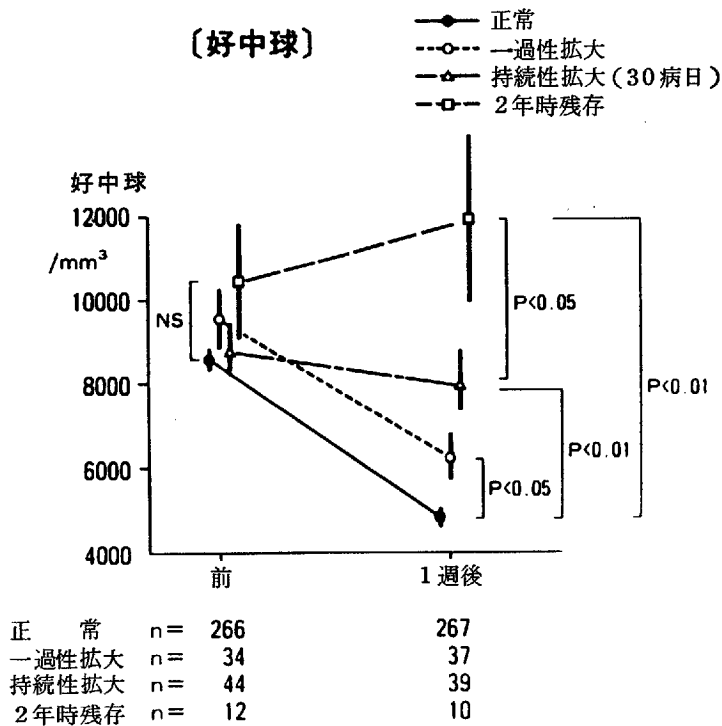


図3 冠動脈障害と急性期の好中球数との関係

考察 急性期におけるCAL発生率はGG群17.5%, ASA群40.4%と有意にGG群の方が低率であり, また各群の全症例を分母とした際のCAL残存率が2年間のfollow upのどの時点をとっても有意にGG群で低率であった¹⁾ さらに両群でCAL(+)のものを, 各々100%とした際のCALの退縮率もGG群でより顕著であることが示された。このことはGG療法がCAL発生率を低下させるのみならず, CALそのものの退縮率にも好影響を与えていることを示している。

CAL(-)のもの, 一過性のCAL, 持続性CALおよび2年間CAL(+)のものの, の4群間で急性期の白血球(好中球)数の低下率を比較すると, こ

の順に次第に悪くなっている。すなわち, 急性期に白血球10000/cmm以下, 好中球5000/cmm以下になれば持続性CALの発生の危険性は極めて少くなるといえる。このことはGG療法の適用または終了する時期を知る上で有用である。

文 献

- 1) 古庄巻史(共著): γ -グロブリン療法, 川崎病(川崎富作ほか編) P254-259, 南江堂, 東京, 1988
- 2) 古庄巻史: 川崎病における治療法別にみた白血球数の動態, Prog. Med. 8: 86-90, 1988.

Abstract

Gammaglobulin Treatment For Kawasaki Disease

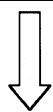
—Long-term follow up study of coronary arterial lesion and changes of WBC counts in acute phase—

Furusho K, Kamiya T, Nakano H, Kiyosawa N, Shinomiya K, Hayashidera T, Hirose O, Manabe Y, Kawarano S, Yokoyama T, Tamura T, Mori C, Baba K, Baba K, Joho K, and Seto S.

Coronary arterial lesion(CAL) was recognized in acute phase of Kawasaki disease(KD) in 43 of 246 patients(17.5%) being treated by high-dose gamma-globulin(GG), whereas, in 38 of 94 patients(40.4%), being treated by aspirin(ASA). During 24 months after the onset of KD, CAL became normalized echocardiographically in 38 of 41 patients(92.7%) in GG-treated group, whereas, in 29 of 36 patients(80.6%) in ASA-treated group.

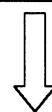
Within first 7 days after beginning of the treatment, WBC(Neutrophile) counts decreased more rapidly in the patients without CAL than those in the patients with transient and persistent CAL.

These results suggest that GG-treatment is effective not only in reducing the overall prevalence of CAL in KD but also in reducing the persistency of CAL. According to the decreasing rate of WBC(Neutrophile) counts during the treatment, we may control the dose of GG and/or duration of GG-treatment.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約 川崎病急性期の冠動脈障害(CLA)の発生は γ -グロブリン治療群(GG 群)では 246 例中 43 例(17.5%), アスピリン治療群(ASA 群)では 94 例中 38 例(40.4%)であった。1)CAL 発生例を各々100%とした場合。2 年後, GG 群では 92.7%が, ASA 群では 80.6%がエコー上, CAL が正常化した。また 2 年間, CAL が持続するような症例では急性期の治療中に CAL のない症例と比較して, 白血球(好中球)数の低下率が極めて悪かった。GG 療法の有用性を再確認するとともに, 白血球数の変動を観察することにより, γ -グロブリン投与量を加減できるように思われた。